

残暑厳しい日が続いています。

この夏我が家の娘は母親の実家に行き、いところから話題の“たまごっち”をもらってきました。小さなおもちゃですがピピッという音に合わせ食事をあげたり排便をしたり、またしつけをしたりと、ひよこを成長させています。子育てのパーソナル体験が出来るようで子供は楽しんでいますが、リアルに出来ていて少し目を離していると死も訪れます。するとまたスイッチ一つで当たり前のように新たな命を誕生させるのです。

“生死”を安易に遊びの道具とするこのおもちゃ。どうも私は好きになれません。

< 第 2 6 回 ほほえみの会 >

今回は最近入院された方を含め 1 2、3 人の出席でしたが浜松にある聖隷クリストファー看護大学の鈴木恵理子教授も出席して下さいました。

最近入院された方は効果のある薬を探しながらの治療にはいるということです。頑張ってください。

入院中のおもちゃの与え方についても話しが出ました。辛い治療を頑張っていると思うとせがまれるままに毎日何かを買って行ってしまふ。でもそのおもちゃも 1 日で飽きてしまふ。例えば、点滴をとめるチューブと一緒に作るなど、親子で一緒に遊べる事を考えたらどうか。

あわせて子供へのしつけも話題となりました。入院中のしつけをどの程度考えればいいのか。また退院後元気になったが甘えん坊で困るなどです。

これに対し、他の方からは今は、普通の子でも甘やかせて育てているので、病気で頑張っている子は甘やかせていいのではないか。治療で苦しいとき甘やかせていたら看護婦さんに退院したときのことを考えてと諭された。

鈴木教授からは治療をしている子供は体の自由がきかないため、活動がうまくいかずストレスがたまる。母親と一緒に遊んでやるのが一番だが、母親も遊びの専門家ではなくどうしていいか分からない。子供は病気に対する我慢は出来ても、物に対する我慢は育っていない。でもそれは大きくなるまで尾を引くことではない。

看護婦さんからは子どもたちは辛い治療を一人で耐えて早く家に帰りたい。泣きわめいて検査を受けるときも泣くことをとがめるより、検査が出来たことをほめてやるようにしている。

また親は付き添いがいいか、面会がいいかという話が出ました。付き添いでいれば子供が大変な時ずっと近くにいてあげられる。離れるのが不安だから一緒にいたい。一方で家におじいさんやおばあさんがいないと大変。親が病院で暇でやることがない。親の体が持たない。浜松医大は付き添いだが親がこれない子がエレベーター前でじっと待っている姿や、小さい子の場合親を離さず、トイレにも行けないこともあるという事です。

面会では親が自分の生活を確保できる。元気な顔で子供に会える。短時間にスキンシップが深まる。これは親が選べるものではなく病院のシステムで決まるものですがこども病院は看護婦さんも多く恵まれているようです。

次回は 9 月 1 4 日 ( 日 ) 1 2 時からです

ほほえみの会 代表 池田恵一